

命のビザ「杉原千畝」の足跡を追って

NO 127

2019年 9月

城取フードサービス研究所

城取 博幸

杉原千畝の足跡を追ったものをまとめた旅行記です

(旅行のブログをまとめたものです)

目次

- ・映画「杉原千畝」 2015年12月上映 P2～P5
- ・ポーランド クラクフ「アウシュビッツ第2収容所」(2014年10月訪問) P6～P7
- ・ドイツ ミューヘン「ダッハウ強制収容所」(2015年5月訪問)
- ・中国 大連 旅順(2013年7月訪問) P8～P13
- ・東京 「センポ ミュージアム(杉原千畝博物館)」(2019年4月訪問) P14
- ・ポーランド クラクフの「シンドラー工場跡」(2015年10月訪問) P15～P19
- ・ロシア ウラジオストック(2016年9月訪問) P20～P25
- ・敦賀はかつて「国際都市」であった(2017年7月訪問) P26～P29
- ・上海「猶太(ユダヤ)難民記念館」(2017年9月訪問) P30～P36
- ・リトアニア ヴィリニユスの「杉原千畝」の足跡をたどる (2019年3月訪問) P37～P62
 - 杉原千畝関連①「杉原千畝記念碑」と「記念公園」 P37～P42
 - 杉原千畝関連② ヴィリニユスの「ホロコースト・ミュージアム」 P42～P50
- ・リトアニア カウナスの「杉原千畝」の足跡をたどる (2019年3月訪問) P63～P85
 - 杉原千畝関連③「カウナス中央駅」 P63～P68
 - 杉原千畝関連④ カウナスの「杉原千畝記念館」 P70～P75
 - 杉原千畝関連⑤ カウナスの「メトロポールホテル」 P76～P78
 - 杉原千畝関連⑥ カウナスの「カウナス第九要塞」 P79～P85
- ・オーストラリア「ユダヤ博物館」(2019年2月訪問) P86～P87

映画「杉原千畝」 2015年12月上映

研究のきっかけはこの映画から

「杉原千畝」もぜひ、ぜひ見ておきたい映画の一つ。

できれば、「シンドラーのリスト」も見ると時代背景がよく分かります



ストーリーは、第二次世界大戦下、外交官としてリトアニアで、ナチスの迫害から逃れたユダヤ人に日本通過ヴィザを発給し、6000人も命を救ったという事実に基づく話



登場人物

- ・「杉原幸子」千畝の妻 外交官の妻として夫を献身的に支える
- ・「大島浩」駐ドイツ日本大使 三国同盟下の重要人物



左から

- ・「南川欽吾」 関東軍将校
- ・「大迫辰雄」 JTB社員 ウラジオストック勤務
- ・「根井三郎」 ウラジオストック総領事代理 ハルピン学院では千畝の同窓生
- ・「菊池静男」 保険外交員 千畝の妻の兄
- ・「関満一郎」 外務省官僚 千畝の上司
- ・「大橋忠一」 満州国外交部次長 ロシアと北満州鉄道譲渡交渉の中心人物



左から

- ・「ペシュ」 ポーランド政府のスパイ 千畝に情報提供をする
- ・「イリーナ」 満州国で千畝に情報提供をした白系ロシア人
- ・「ニシュリ」 リトアニア カウナスに逃れてきたユダヤ難民のリーダー的存在
- ・「グツジェ」 カウナス日本領事館職員 ドイツ系リトアニア人



右上の写真は、千畝がカウナスを離れる時に、グッジェから渡された「ビザ発給者のリスト」
同じくユダヤ人を助けた「シンドラーのリスト」と同じ
左下は、ユダヤ難民を、ウラジオストックから日本に移送した「天草丸」



理解を深めるための解説



- ・「満州国」とは、1932年～1945年の間 日本が占領した国
- ・「インテリジェンス・オフィサー」とは、情報収集、諜報活動を行う外交官
- ・「ペルソナ・ノン・グラータ」とは、ラテン語の直訳で「好ましからざる人物」
- ・「北満州鉄道譲渡交渉」とは、千畝の努力により、1935年3月決着
- ・「白系ロシア人」ロシア革命後、国外に逃れたロシア人 「赤」に対極の「白」
- ・「リトアニア カウナス」ロシア帝国支配後、ナチスドイツが侵略した国
- ・「ユダヤ人」とは、ユダヤ教信者 特定の国を持たない リトアニア日本領事館に押し寄せたのはポーランドのユダヤ人
- ・「独ソ開戦」1941年6月 「独ソ不可侵条約」を廃棄してドイツがソ連に侵攻
- ・「オランダ領事代理 ヤン」ヴィザを発行するには、「訪問国（最終目的地）」が必要
ヤンは「オランダ領 カリブ海のキュラソー島」と記した証明書を発行した
- ・「ポーランド情報将校」当時はポーランドという国は消滅していた ペシュの目的は、ヴィザ を取得し、ロンドンの「ポーランド亡命政府」に情報を届けることだった
- ・「アメリカ軍 日系二世部隊」 日系二世部隊は、アメリカ軍の中で一番死傷者を出したドイツ ミューヘンの「ダッハウ強制収容所」は、アメリカ日系二世部隊 522野戦砲兵大隊によって解放された

* ドイツはソ連と「不可侵条約」を結んでいたにも関わらず、ソ連に侵攻した
ヒトラーの最大の暴挙

それにより、「三国同盟」+「ソ連」の構図が崩れて、日本にとって不利な状況となる
世界の戦力バランスが崩れ、仲裁役のいない泥沼の戦争へと向かう

カウナスの「杉原千畝博物館」は訪れたことはないが、いつか訪れたいと思っています

ポーランドの「アウシュビッツ強制収容所」「シンドラー博物館」、ドイツ ミューヘンの「ダッハウ強制収容所」は訪れたことはある

杉原千畝が救えなかったユダヤ人は、強制収容所に送られ悲惨な人生を送った

ポーランド クワクフ「アウシュビツシュ第2収容所」(2014年10月訪問)



ドイツ ミューヘン「ダッハウ強制収容所」(2015年5月訪問)



記念館内に展示されている、解放当時の写真には、ここには日系二世の顔が映る写真はな
い



ただ、右下をよく見ると東洋人らしき後ろ姿が見える



アメリカは、1992年までこのことは公表されていなかった

当時のアメリカ本土では、日系人は強制収容所に収容されていた

ドイツ人やイタリア人の強制収容所はなかった

さらに、ポーランド政府のスパイ「ペシュ」が、初めて杉原に会った時

「日本人には感謝している」という言葉がある それはなぜか？

「日本が765人のポーランド孤児を救出した」

ロシア革命後の混乱の中、シベリアの地で苦境に陥っていたポーランド人の孤児たち765人を、大正9年（1920）と、大正11年（1922）の2回にわたって日本が救出したことで

映画では紹介されていませんが、これも知っておきたい事実です

ソリー・ガノールと杉原千畝 2019年1月テレビ東京「なぜそこに日本人」より

ソリーと日本人との関係

ソリーのユダヤ人救済の姿を見て、杉原にビザの発給を決断させた話はよく知られているが、ソリーの家族は母の反対から出国が遅れ、強制収容所に送られる

最後の収容所が「ミュンヘン ダッハウ強制収容所」であった そこを解放したのが日系アメリカ軍兵士 ソリーは「なぜここに日本人が」と驚いたという



さらに、さらに、知っておきたい事実 ユダヤ人を救ったのは「杉原千畝」だけではない 「樋口季一郎（陸軍中将）」「安江仙弘（陸軍大佐）」「東條英樹（当時関東軍参謀長）」なる人物

大連市内の様子 (2013年7月訪問)

中山広場の「旧ヤマトホテル」



ロシアの教会

旧満州鉄道本社 社屋



蒸気機関車のレプリカ

映画に登場したロシアの最新蒸気機関車によく似ている

側面に星のマークが付いている

ソ連が建てた「旅順駅 駅舎」



阿部総理が言うように

「日本人は、悪いこともしたが、いいこともした」

悪かったことは大いに反省し、いいことは主張することも必要

戦後の「自虐教育」の中で、埋もれたいい事も勉強せねばなりません

岐阜県八百津町「杉原千畝記念館」 (2017年7月訪問)

岐阜県八百津町の「杉原千畝記念館」に行ってきました

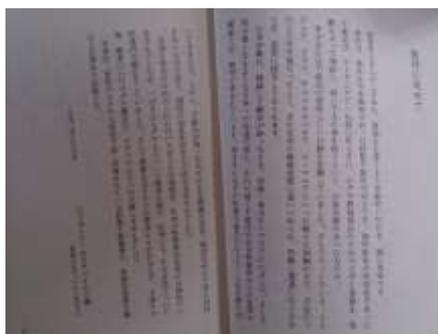
ユネスコ世界記憶遺産に登録されました

毎年7月は、わたしのライフワーク「戦争と平和について考える」「日本が関係した世界史」をテーマにして国内外を歩いている

今回のテーマは、日本のシンドラー「杉原千畝」と「引揚者」

まずは、本を読んで予習しておく

「六千人の命のビザ」 杉原幸子(千畝の妻)著 大正出版



本の最初の「発刊に寄せて」は、英国ロスチャイルド家の「エドモンド・ロスチルド」のことば
これは、

杉原千畝は、どの時期に何をしたか整理しておく必要がある

日本の「河豚(ふぐ)計画(上海にユダヤ人居住区をつくる計画)」と杉原千畝の行動
年表

1931年9月 柳条湖事件発生 満州事変勃発

1932年3月 満州国建国

1934年8月 ヒトラー ドイツ総督就任

1938年1月 「河豚(ふぐ)計画」 外務省「回教および猶太(ユダヤ)問題委員会設置」

1939年6月 ベルリン満州国書記官 王替夫、ユダヤ難民らにビザ発給(12000通以上)

1939年9月 ドイツ軍 ポーランドに侵攻 第二次世界大戦勃発

1940年7月 リトアニア領事代理「杉原千畝」ユダヤ人らへ日本通過ビザ発給 およそ6000人を
救う

1940年8月 ソ連、リトアニアを併合

1940年9月 「日独伊三国軍事同盟」締結

1941年8月 ユダヤ難民 上海移住開始

1941年12月 日本軍、英米に宣戦布告 太平洋戦争勃発

1942年3月 「猶太人対策要綱」の廃止

杉原千畝の単独行動は、まったく日本政府の方針に反したものではなかった

外務省の許可なしに通過ビザを発行したが、何のお咎めもなく、7年間

ヨーロッパで外交官として活動

帰国後、解雇されたが、それは外務省のリストラの一環であったという人もいる
杉原千畝の名誉回復に尽力したのは、当時、外務政務次官の
「鈴木宗男」氏であった

中央道名古屋方面「恵那」で降りる
伊那の自宅から1時間、さらに1時間走る



天竜川を渡る

千枚田(棚田)が見えてくる



千畝の名前の由来は、千枚田の畦(あぜ)が、千の畝(盛り上げられた土)に見えることから、この
名前がつけられたといわれている

林道を行くと「八百津町」の看板が見えてくる



過疎化が進み閉店した商店

1時間走ってもスーパーらしき店是一件もない

「杉原千畝記念館」に到着



杉原千畝の母の出身地が八百津町

千畝はここで生まれているが、父は税務署職員であったため、各地を転々とする
転々とする

館中は撮影禁止

人の顔が映った写真は肖像権があるからだ

予想通り、「ホロコースト」など宗教色が少し強い感じのする記念館だ



当時の出務室が再現されている

椅子に座り、ここで写真を一枚

記念のビザに捺印



説明ビデオを見るが、映画のように「命のリレー」に登場する人物の説明が少ない
これは残念

「人道の丘」入口



胸像 奥が記念館

人道の丘のセラミックオルガン



音楽が終われば噴水になる

少し坂を下れば平和のモニュメント



丘から見る八百津町の景色

「シュバイツァーの像」



「ナイチンゲールの像」

なんでも建てればいいというものではない
そうであれば「アンネフランクの像」も欲しかった
近くのレストランで昼食



「ダムカレー」を注文
近くには丸山ダムがある
ダムを形取った二重のごはん
中心には放水口を形取った食パン

ルーは自分でよそう
カレーの具が少ないため、ダムがすぐに決壊した
盛りすぎでしょ
近所は大きな家が多い
帰りは雨 伊那の自宅に向かう



以上で「杉原千畝記念館」については終わり
翌日は、奈良の食品メーカーに寄ってから、舞鶴に向かう予定
目的は「舞鶴引揚記念館」、さらに足をのばして「敦賀ムゼウム」にも行く予定
勿論、キッチン付きホテルに泊まり、地元のスーパーマーケットを視察し買い物する予定
国内でも海外でもスタイルは変わらない

東京 「センポ ミュージアム (杉原千畝博物館)」 (2019年4月訪問)

住所 東京都中央区八重洲2丁目

2019年3月23日 開館



東京駅から歩いてすぐ



展示品



ポーランド クラクフの「シンドラー」(2015年10月訪問)

ユダヤ人を助けた人々

わざわざポーランドのクラクフまで来た目的は、スーパーマーケットの研究ではありません。歴史の勉強とその事実の検証を目的に来ました。

興味のある方は読んでみてください。

ユダヤ人を救った3人の日本人

歴史の教科書では教えてくれない事実。

杉原千畝

6000人のユダヤ人を救った杉原千畝

「杉原ヴィザは日本・ポーランド友好関係の成果」

1940年8月、リトアニアのカウナスにおいて、杉原千畝副領事が日本の通過ヴィザを発行し、6000人のユダヤ人を助けたのはあまりにも有名な話である。

杉原千畝の人道的な行為によって、ポーランド国籍のユダヤ人の多くが、ナチスの大量虐殺から救われた。

ポーランドは「バルト海」に面している。

当時最強と言われた、ロシアの「バルチック艦隊」は、ここから日本海へと向かった。

そのバルチック艦隊を日本が破ったという噂はヨーロッパ中に広がった。

日露戦争のとき日本は、ロシアの圧政に苦しむポーランドに武器や資金を援助した。

ロシアの情報収集を目的にしたこともある。

1918年ポーランドが独立した時も、独立を最初に承認した国家の一つが日本だった。

そんな歴史がポーランドと日本との関係は今も良好だ

樋口季一郎

数千人のユダヤ人の命を救ったもう一人の偉大な日本人

「オトポール事件」

「杉原千畝の生命のビザ」の2年前の話です

1938年、ナチスのユダヤ人狩りから逃れて来た数千人のユダヤ難民たちがいた。

迫害を逃れてきたユダヤ人はヨーロッパからシベリア鉄道でソ連を経由し、日本の支配下にある満州国を通してアメリカなどに向かうしか生きる道がありませんでした。

満州鉄道のオトポール駅はユダヤ人で溢れていた

当時日本はドイツとイタリアとの「三国同盟(1940年)」はまだ結んでいない

樋口季一郎は満州国外交部にユダヤ難民たちにビザを発給することを指示しました。

この、樋口季一郎少将のユダヤ人救出に「まさに 八紘一宇(はっこういちう 道義的に天下を一つの家のようにするという考え)である」として許可を出し外務部とドイツを説き伏せた

関東軍参謀長は「東條英機」（後の内閣総理大臣）であった。

救援のための列車を動かしたのは、当時の満鉄総裁 「松岡洋右」

東京裁判で無罪になったのは樋口季一郎、東条英機、 松岡洋右 はA級戦犯

東條英機、松岡洋右は絞首刑

樋口季一郎は、アメリカのユダヤ人団体の嘆願で死刑を免れた

この流れがあったからこそ杉原千畝はビザの発行ができたわけです

樋口季一郎と安江仙弘の名前は「ユダヤのゴールデン・ブック」に記載されている

オスカー・シンドラ

1200人のユダヤ人を救ったドイツ人実業家

メーレン（当時オーストリア領、現チェコ領）生まれのズデーテン・ドイツ人の実業家。

第二次世界大戦中、ドイツにより強制収容所に収容されていたユダヤ人のうち、自身の工場
で雇用していた1,200人を虐殺から救った。

スピルバーグの映画「シンドラのリスト」はあまりにも有名。

クラクフには当時の工場が残され、「シンドラ博物館」となっている。

クラクフに来る前に「シンドラのリスト」と、イタリア映画「ライフ イズ ビューティ
フル」をビデオで見る。

「シンドラのリスト」はテレビで見たことがあったがもう一度確認する。

「ライフ イズ ビューティフル」は途中まで何の映画かよく分からないが、後半は涙をそ
そられる。イタリアらしい映画



「シンドラ博物館」への行きかた

クラクフ中央駅前の③のトラムに乗り、ヴィスワ川を過ぎたら下車



降りたら左側に出て、細い路地に入る
通りの名前は



さらに進んで、こんなゲートをくぐる
そこを過ぎれば「美術館」



その隣が「シンドラーファクトリー・ミュージアム」



土曜日は「休館」であった。
外だけでも写真を撮る
働いていたユダヤ人の写真が貼ってある。



こんなマークも
ここにも花が供えられている



まあ中は見なくても、映画「シンドラーのリスト」で詳しく紹介されてる。

最後に、ヨーロッパではタブーとされるキワドイ話を少しだけ
右の本「住んでみたヨーロッパ 9勝1敗で日本の勝ち」「川口マーン恵美著」講談社
の中に書かれていたこと。



「奴隷」を英訳すると「SLAVE」です。
その語源は、「スラブ人」から来ています。
スラブ人とは、主に中欧に住んでいた迫害を受けていた民族です。
オリエントからアラブを通して、オリエントの文化や製品がヨーロッパに運ばれた。
ヨーロッパの貴族や金持ちは、好んでオリエントの商品を買いあさった。
しかし、輸入超過になり、支払いが困難になる。
ヨーロッパの毛皮などはオリエントでは売れない。
そこで、考えたのが「人間」を売ること。

アフリカからの奴隷は誰でも知っていますが、白人の奴隷はあまり知られていません。
「アラビアンナイト」に出てくる、白人のハーレムの女性や奴隷は、そうした人々です。
と、この本に書いてあります。

迫害されていたのは、ユダヤ人だけではない。

有名な音楽家ワーグナーは、

「ドイツ人を構成するゲルマン民族こそ最も優秀なアーリア人であると主張。」

この思想は、熱心なワグネリアンだったヒトラーに受け継がれ、政治的に利用されること
となり「ホロコースト」にまで発展した。

ロシア ウラジオストック（2016年9月訪問）

S7でユジノサハリンスクからウラジオストックへ

台風の影響で飛行機が飛ぶかどうか心配であった

自分としては飛ばないほうが、滞在が長引いて得するのだが

現地の旅行社のガイドが心配してホテルまで迎えに来て、空港まで連れて行ってくれた

今回は、日本の旅行社に、「航空券」「ホテル」「送迎」のみを依頼

後は自由行動だが、旅行社が心配して手配してくれたようだ

感謝！ 感謝！

どうにか飛びそうである

黄緑色の飛行機がワンワールドに加盟しているシベリア航空S7



アエロフロート航空

アライアンスは「スカイチーム」

機内食

「チキンサンド」か「チーズサンド」を選択

チキンサンドをお願いする

食パンが固い



通路側の席をリクエストしたら、一番後部席
隣の2人は、赤色のバッジを付けた人
窓側が上司らしい

ロシア語の雑誌を読んでいる
カバンには「JAPAN EXPRESS」と書かれている
国境を接しているため極東ロシアにはけっこう多い

迎えに来た車に乗り、ホテルに到着



格式高いホテル しかし、シングルルームは、シティビューで部屋は狭い



時間が半日しかないので、さっそく市内探索

ホテル～ウラジオストック駅～アレウツカヤ通り～バスターミナル～クローバーハウスショッピングセンター～中央広場～潜水艦博物館～ホテルのコース



台風の影響があり、所によっては道は川のようになっている

レーニン像



ウラジオストック駅 シベリア鉄道の出発点 モスクワまでつながっている
建設当初は日本人の出稼ぎ労働者も建設に加わったようだ



車が多い割には意外と空気が汚染されていない
その理由は、日本車が90%以上だからだ



建物内部

荷物検査があるため、ここまで

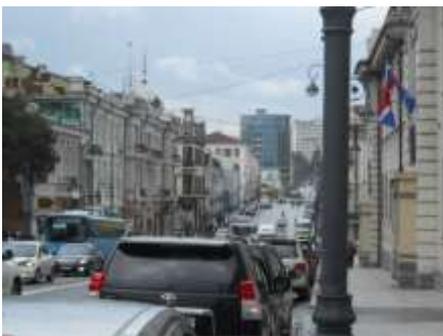


長距離列車

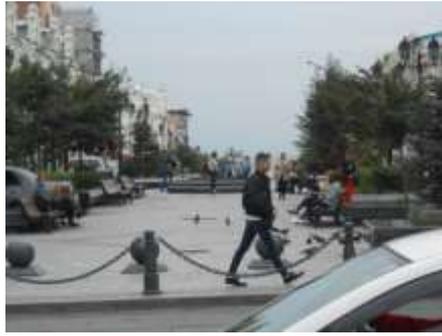
杉原千畝が救った6000人のユダヤ人の一部はこの駅に到着し、船で日本に向かった
歴史ある駅だ

アレウーツカヤ通り

古いヨーロッパの匂いがする



美術館



観光客でにぎわうフォーキーナ通り
道を挟んだ繁華街



クローバーハウスショッピングセンター
バスターミナルの目の前
下はシベリア鉄道の線路



地下には巨大なスーパーマーケット
後で報告します
中央広場へ向かう
雨が降り出したので、急いで潜水艦博物館へ
道路は水浸し



潜水艦博物館

中が博物館になっている

これが、樺太からの引き揚げ船を沈没させたのか？

アメリカ製、中国製の潜水艦を見てきたので、ソ連製も見ておかないと

奥はアンドレイ協会

1941年「モスクワの戦い」

独ソ不可侵条約を結んであったが、10月2日より、ドイツ軍によるモスクワへの攻略戦「タイフーン作戦」によって行われた戦闘 12月5日、モスクワ攻略失敗で終了



永遠の火

港 軍艦が停泊しているため、あまり近づいてウロウロしていると、日本に帰れないかも



軍艦をよく見ると、後部に対潜水艦用落雷の発射口が、合計12本もついている

あまり書くと、出禁を食らうかも

あまり深入りしないほうがいい

敦賀はかつて「国際都市」であった(2017年7月訪問)

西舞鶴～東舞鶴～敦賀へ

西舞鶴から普通列車で東舞鶴で乗り換え、福井県敦賀市へと向かう

片道2時間、運賃は1850円



電車は、外から中は見えないが、中から外の景色は見える

しかしデジカメが撮れないのが難点

昔ながらの民家の風景

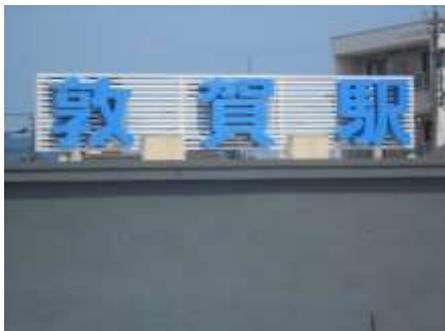


オバマ大統領で有名になった小浜

敦賀駅に到着

敦賀市の人口は約65000人

ここも過疎化が進んでいるが、観光に力を入れている



観光案内図

目的は「赤レンガ倉庫」と「敦賀ミュージウム」「日本海さかな街」

それに、地元のスーパーマーケット視察

周遊バス1日券(500円)を購入してバスに乗る

かつて、海軍の石油貯蔵倉庫として使われていた「赤レンガ倉庫」
国の「有形文化財」に指定されている



舞鶴の赤レンガ倉庫に比べれば規模は小さい
半分はレストラン、半分は敦賀の巨大ジオラマ

レストラン

客の多くは団体客



400 円を払い巨大ジオラマを見る

国際都市であった敦賀のジオラマ



照明が消され、敦賀の歴史をビデオで放映
朝、昼、晩と街の景色が変わる

道を挟んで反対側に「敦賀ムゼウム」

規模が小さく展示物も少ないが、貴重な情報が得られた 館内は撮影禁止



ここで確認した3つの歴史的事実



1. 敦賀はヨーロッパと日本との交通の拠点であった(1902年～1941年)

「欧亜国際連絡列車」とは

1902年 「敦賀」と「ウラジオストック」間に直通航路が開設された

1912年 シベリア鉄道を利用して、ヨーロッパの各都市を結ぶ拠港となる

東京(新橋)、敦賀(金ヶ崎駅)間に「欧亜国際連絡直通列車」が走った 当時、東京でパリ行きのチケットが買えたらしい ソ連からも観光客が訪れたという

敦賀～舞鶴間は日本海ではじめて蒸気機関車が走った



2. ポーランド孤児763人が敦賀港に上陸(1920年～22年)

1920年(大正9年) 日本赤十字の援助により、ウラジオストックから陸軍の輸送船「筑前丸」で、シベリアで家族を失ったポーランド人孤児が入港した

計6回に渡り、763人もの孤児が救われた

敦賀町は、宿泊、休憩所、食料などを提供した

ポーランド孤児については、「ポーランド見聞録」でも紹介したが、彼らが上陸した敦賀についてはここで知った

それにしても、孤児が763名ということは、1500名以上の両親が亡くなっていたことになる

3. ユダヤ難民約6000人が敦賀港に上陸(1940年～41年)

杉原千畝の「命のビザ」については何度も説明しているため省く

敦賀に上陸したユダヤ人と敦賀の人々のエピソードについて触れる

①「天国(ヘブン)に見えた敦賀の街」(ユダヤ人証言)

「山に雪がつもっていて、敦賀は悪夢から解放された楽園のようだった」

「人々は親切で自由に街を歩くことができた」

②「リンゴの少年」(市民の証言)

少年がリンゴとミカンを渡すと、1個のリンゴを1口ほうばると、次々に後ろに回し分け合っていた」

③「銭湯を無料開放」

港近くにあった「朝日湯」がユダヤ人に銭湯を1日無料開放(ユダヤ人の証言)

「温かい湯は気持ちがよくて、本当にうれしかった」

④時計や貴金属を売りに来た

シベリア鉄道でソ連軍に現金や貴金属を没収され一文無しのユダヤ人もいた

地元の「渡辺時計店」は、時計や貴金属を買い取り、食料まで援助した

敦賀が「国際都市」で、市民は「国際人」であったという証拠

杉原千畝の精神がリレーされ、敦賀の人々に受け継がれた



お土産に記念のお菓子を買う

上海「猶太(ユダヤ)難民記念館」(2017年9月訪問)

私のライフワークの一つ「日本が関係した世界史」の調査で上海の「猶太難民記念館」を訪れた
1933年～1941年にかけてナチスの迫害を逃れて約3万人のユダヤ人が上海にやってきた
日本は「河豚計画」により、「無国籍難民限定居住区」をつくりユダヤ人を保護した
記念館資料は「強制的に居住させた」とあるが
当時のままの建物が記念館になっている

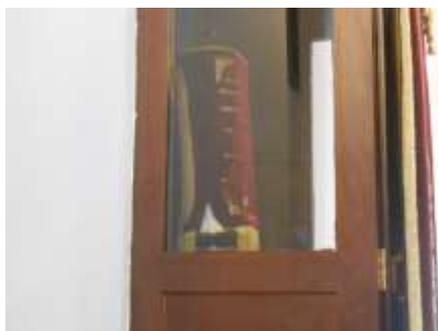


入り口のプレート

2007年オープン ガイドブックには紹介されていない
入館者は白人が殆ど 東洋人は少ない
希望すれば英語と中国語のガイドがつく
しっかり説明を確認して疑問があれば質問しなくては



まずユダヤ教会



横から覗くと「アーク」らしきものが見える

ステンドグラスに注目

上部に「六もう星」、下に「ローソクスタンド」これがユダヤのシンボル
中の絵をよく見ると ブルーは海、ヤシの木が見え、陸地が見える
上のブルーは空 太陽の絵が「旭日旗」に見えるのは私だけだろうか

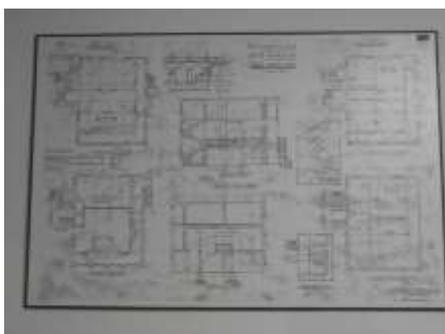


裏から見た建物



当時住んでいたユダヤ人名簿刻まれている 自分のルーツを探して世界中からユダヤ人が訪れるようだ 現在の生きている人もいるらしい
壁の裏の当時の建物は今も人が住んでいる

案内図



2号館に入れば「ユダヤの暦」

ユダヤ教のシンボル 7本のローソク立て これは1週間を意味している 1日は「安息日」を設けるよう決められているらしい これが現在の「週休1日」も元になったかも



暗い部屋に入ると、通訳がライトを当てる 銅板に刻まれたような絵が浮かび上がる 当時のユダヤ人の生活が描かれている



いつ誰が描いたか分からないが、
右下に日本の軍人
トラックに人を乗せている絵

橋の名前は「提籃橋」

外灘(バンド)を左に進めば左に赤い橋が見える

その橋を渡れば当時の日本の租借地、そこにユダヤ人居住地があった
上海には各国の租界があったが、ユダヤ人を受け入れたのは日本だけだ



中の展示物

ユダヤ人は上海まで3ルートあった

1. 陸路を通過してハルピンから上海へ

ハルピンは当時日本の植民地、日本のビザがなければ上海には行けなかった(日本が通過ビザを出している)

2. シベリア鉄道、ナホトカ～敦賀～神戸～上海のルート(杉原の日本通過ビザにより)

3. スエズ運河を通り上海までの海上ルート



当時の上海

アヘン戦争で大儲けした、シャーディーン・マセソン商会、サッスーン商会などのユダヤ系財閥がすでに存在していた

当時の高層マンション



部屋は寿司詰め状態

当時の上海の地図

ユダヤ人居住地が描かれている



展示物に「杉原千畝」の写真

杉原がユダヤ人に日本通過ビザを発給したのは、1940年の7月から8月にかけて(日独伊三国同盟提携はその年の9月、真珠湾攻撃は41年12月)

杉原のビザは随分後の話である

その前にユダヤ人にビザを発給したのはだれか？

その人は日本陸軍軍人「樋口季一郎」(イスラエルのゴールデンブックに刻まれている)

「ヒグチ・ルート」とも言われていた

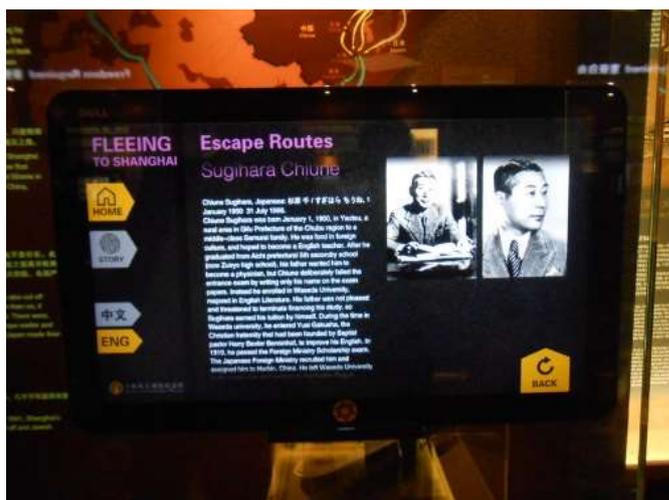
戦後、世界ユダヤ協会の嘆願で戦犯名簿から外された人物

孫の「樋口隆一」は、わが母校の明治学院大学の名誉教授

なにか因縁を感じる

通訳に「樋口季一郎の記録はないのか？」と尋ねると

「NO」と答える



中国のシンドラ「何鳳山(かほうざん)」

第二次世界大戦中、ウィーンに赴任していた「中華民国」の外交官

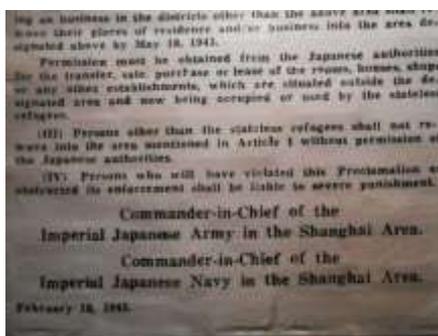
オーストリアのユダヤ人にビザを発給した人物

戦後、台湾から米国に移住



当時の書類

終戦ごほとんどの書類は焼却がされた運よく残った



気になる文章

「日本はユダヤ人居住区からのユダヤ人の自由な出入りを禁止した」と書かれている
あたかも、ナチが作った「ゲットー(強制的に住ませた居住区)」のように聞こえるが、ここは「キ
ャンプ(難民施設)」であったことを忘れてはならない
申請を行えば外に出ることができた

ユダヤ人の感謝のこぼ

第3展示室には、日本人とユダヤ人が笑顔で写っている写真がある
ユダヤ人が日本人に迫害を受けたとする証言は一つもない
よく注視していないと、いつのまにか歴史が歪められてしまう



道を挟んだ反対側に当時のカフェが再現されている



当時の部屋の様子

ユダヤ人居住区には今は中国人が住んでいて「リトル・ウィーン」と呼ばれている地域もある



ユダヤ人も関係しているため、それほどひどい記念館ではなかったが、注視しておかねばならない

バルト三国リトアニア「杉原千畝」の足跡をたどる (2019年3月訪問)

リトアニア ヴィリニユス編

杉原千畝関連 ① 「杉原千畝記念碑」と「記念公園」

「日本人が関係した世界史」の研究で「杉原千畝」に関する史跡を徹底調査

旧市街から川を渡った新市街の川べりに建てられている

天皇陛下と小泉元総理も訪れた場所

道の左側にも桜の木が植えられている



公園の中にポツンと碑が立っている

碑の脇 リトアニア語で書かれているため意味が分からない



杉原千畝の記念碑



1900年1月1日誕生 1986年 86歳で没



早稲田大学が建立
杉原の功績が書かれている

オランダ領「キュラソー」のビザと日本通過ビザ



建立 早稲田大学総長 奥島孝康
設計 桜庭 祐介(文化財修復家)
竣工 2001年10月2日



名前が書かたプレート
風化が進みあまり読めない
一番上に「SUGIHARA YUKIKO(千畝の婦人)」
二番目に「SUGIHARA MICHI(長男弘樹氏の婦人)」

「杉原美智氏」は特定非営利活動法人「杉原千畝 命のビザ」の顧問
理事長は「杉原千弘樹氏(長男)」
なぜ、二番目に美智氏が書かれているかは分からない



碑お前の芝生

かなり足跡がついて踏み固められていることから、観光ルートになっているようだ



道を挟んだ桜公園の中にこんな碑が
これはあまり紹介されていない



「FROM HIROSHIMA」とか書かれている



「広島の被爆敷石」 ひろしま・祈りの石の会
被爆地から約200mの相生橋付近で使われていた市内電車の路線敷石だそうだ
日付は、1991年8月6日のように読める



川の土手に植えられた桜の木

推測だが、早稲田大学の「つくった桜」公園は記念碑のある道の右側の三角地帯
その桜は問題ないが
もう芽が膨らんでいる(2019年3月23日現在)



残念なことに左側の桜公園は、
サクラの木が三分の一ほど枯れている



枯れた後にはこんな杭が



寒さのためか樹の根元が割れている



他の公園はこんな防寒処置がされている木
こうした処置が必要だ

ネリス川を挟み奥は旧市街
リトアニアの教科書にも



天皇皇后両陛下(2007年5月27日当時 現在上皇)も訪問



2019年1月 テレビ東京「なぜそこに日本人」より

2006年9月1日小泉総理(当時)

2018年1月14日 安倍総理もこの場所を訪問されている

もう一つ杉原千畝に関する展示があるということで
「ホロコースト・ミュージアム(グリーンハウス)」へ翌日向かう
しばらく、こんな特集が続きます
興味のある方は付き合ってください

杉原千畝関連 ② ヴィリニウスの「ホロコースト・ミュージアム」

オーストラリア メルボルンにも「ホロコースト・ミュージアム」あったが、日本人とはあまり関係がな
いため訪問しなかった

しかし、ヴィリニウスには杉原の展示もあるということで足を伸ばす



途中の公園

ホロコースト・ミュージアム(グリーンハウス)

民家を活用している



広場の手前は桜の木
奥に石造、右側にプレートが



「月光」プレートに書かれた文字

「LET THE MOONLIGHT GLANCE TO THE NOBLE MAN、CONSUL OF JAPAN IN LITHUANIA」と書かれている

「崇高な人に月の光が差し込むように」とでも訳すのか



斜めに光のようなものが走っているが、これはここを横断する人の足跡のようだ



「月光」三日月を両手で持ち上げている像
ここで不思議なことが



ほぼ同じ時間、同じアングルで写真を撮っていると
急に日の光が差し込む

三日月の右の影が濃くなっている

「月光」ではなく「日光」が差し込んだ 何か持っている



グリーンハウスの右側にあるオブジェ
ここは意識して見に行かないと見過ごしてします



「ヤン・ズヴァルテンディク」の記念碑
オランダ領キュラソービザを発給したオランダ領事代理
ヤンのビザがなければユダヤ人は救えなかった
杉原とは前から交流があったという 風化して文字が殆ど読めない



グリーンハウスの入口
ブザーを押してドアを開けてもらう



ユダヤ人家族の写真
かなりお金持ちの家族のようだ

展示場

殆ど写真 目をそむける写真ばかりだ



10分弱の英語のビデオを見る



虐待され殺されるユダヤ人の写真

1枚1枚撮影したがここでは残酷すぎて省く



子どもの写真は印象的だ

地下の排水溝を利用した住居



ユダヤ人を救った人々のコーナー



カウナスの日本領事館に現れたユダヤ人
よく使われている写真

「ヤン・ズヴァルテンディク」と「杉原千畝」

杉原は、実際は「1600枚の通過ビザを発行した」と言われているが、「6000人の命のビザ」となっている

これは、一家族に対して1枚発行したからだ

オランダ人のヤンだって、同じ手書きの作業を行っていたため、もう少し評価されてもいい

杉原千畝に関しては、ブログで何回も解説しているのでここは省く

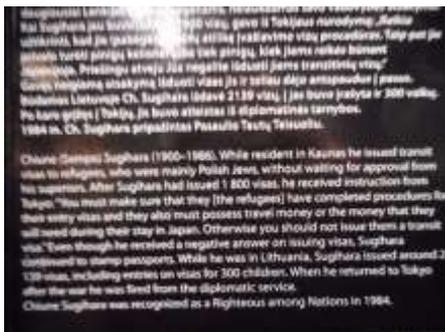
展示物があったことの事実をお伝えします



写真と説明文



下は英語で分かりやすく解説されている



杉原が受け取った勲章



ユダヤの7本の口ウソクならぬ7本の手

入口の像



日付と名前を記帳
奥には「折り鶴」

コメント



途中こんな花が
癒される



よく見ると「あじさい」のような花びら
造花であった 今は3月 近くで見なければよかった

ゲッソーの図

今は殆ど姿を消しているが、ゲッソー跡へ向かう



「ホロコースト」について考える

ホロコーストはナチスドイツだけが起こしたものか？

そうではない

異教徒であるユダヤ人迫害は、キリスト教のヨーロッパ中で起きていた

ドイツに限らず、このころ北に追いやられたユダヤ人は、ポーランド、リトアニア、ロシア(ロシア正教)でも迫害を受けていた

ナチスに協力した者もいる

いわゆる弱いものいじめだ

ポーランドもバルト三国も、ドイツ、ロシアの狭間で国で両方から侵略を受けていた

そこへユダヤ人が大量に入り込んできたから、こういうことが起きた

こうした事実も知っておかなければならない

日本が起こした「大東亜戦争」もそうだ

確かに多くの国に迷惑をかけたことは事実だが

アジアを植民地からの解放の戦いでもあり、独立に向けて一緒に戦った国も多い

それを「日本の侵略戦争」の一言で片づけてよいものなのか

日本はロシア語を話す国になっていたかもしれない

ポーランド、バルト三国を見ているとそれを強く感じた

ヴィリニユスの「シナゴーク」

せっかくの機会なので、ここはユダヤ人の痕跡を徹底的に調べておこう

「ホロコースト博物館」から「シナゴーク」へ向かう

シナゴークとは「ユダヤ教徒の礼拝所」

ここはゲッソーからは少し離れ市場の近くにある

たぶんこの辺で前は商売をしていたのであろう



建物の正面

柵で囲まれていて他の教会と違い中には入れない

古い礼拝場だ

よく破壊されないで残っていたものだ

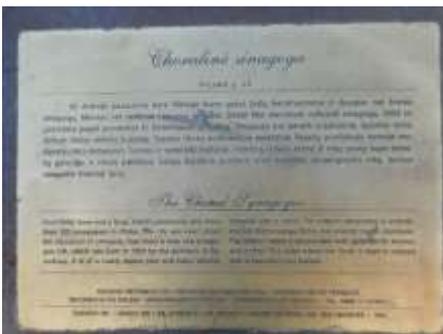
ユダヤの六芒星だが変形している



間違えなくシナゴークだ

何やら説明が書かれている

1903年に建設されたと書かれていることから、第一次世界大戦(1914年～1918年)前だ



アーチ部分に「十六花卉」

日本の「菊の御門」とよく似ている

他にもシナゴークは見ているがこれを見たのは初めて

イスラエルにもあるというが、私は見たことがない

近くの広場には卵のようなオブジェ

近寄って周りを見ても何も書かれていない

シナゴークの正面の柱につけられているものによく似ている

たぶん、ゲットーに隔離される前に、この辺にユダヤ人は住んでいたのではないか



ヴィリニウスの「ゲットー」

ゲットーとは、「ユダヤ人を強制的に住ませた居住地区」

その後、ここはナチスドイツにより徹底的に破壊されその跡は何も残っていない

それはユダヤ人が居なくなったことを意味する

かつて、モンゴル帝国でも、従属しなかったり、逆らった民族は皆殺し(若い女性、荷車の車輪以

下の子供は除かれた)され、町は徹底的に破壊され姿を消した

何も残さなかった

そんなことが再び起きていた

ゲットーのあった場所を歩いてみる

観光客もちらほら見かける



ユダヤ人らしき石造



この通りの両側にユダヤ人の住居があった
しかし、その痕跡は残っていない



かつての通り



「ZYDU g」 ユダヤ通り
これも最近つけられたものだ



その中のレストラン「Lokys」 ロキス
ここで昼食をとることにした
入口には熊の彫り物



ここは、鹿、イノシシ、ビーバーなどのジビエ料理が食べられる
英語は通じる



レストラン内の様子

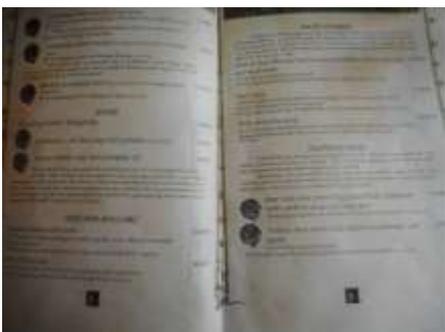
テーブルクロスとナプキンがセットされているため、高級レストランのイメージだ

メニュー

鹿かイノシシか迷う

スタッフにどちらがいいか聞くと、鹿にしておきなさいとの答え

お任せ赤ワインと、名物のピンクの冷製スープと鹿肉のステーキを注文



「シャルティバルシチェイ」

ビーツ、ケフィールでつくる冷たいスープ

トッピングはディル



ボルシチの冷たい版

量が多いためお腹が冷える

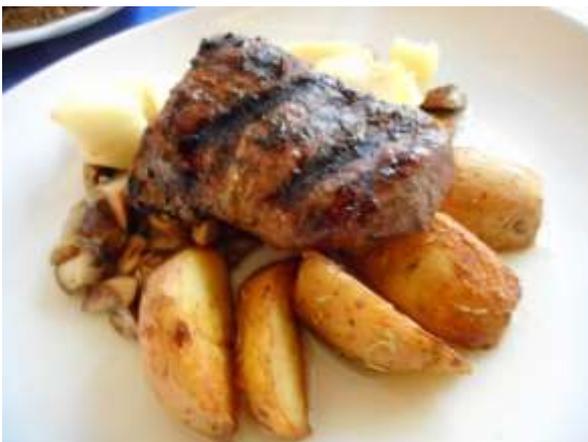
温かいポイルポテトがついてくる



それを冷たいスープの中に入れる
これがおいしい
「鹿のステーキ」ができた



これもポテトの上に盛られている鹿肉のステーキ
塩味のシンプルな味付け 見事な盛り付け
手前はフライドポテト、左はマッシュルームのソティ、奥はリンゴのソティ



ミディアムで注文
ナイフを入れると赤ワイン色の肉汁が流れて出る
2種類の部位 場所によって味が違う



けっこうお腹いっぱいデザートは入らないコーヒーのみ



会計は30.5ユーロ(約4000円) 近くの建物のドアノブみんなが触るのでメッキがはがれている
ゲッターの地図



ユダヤの図書館 ここにも太陽のマークがついている

明日は、「KGB博物館」へ行く予定

ここは、日本との関係はないが、もしも日本が「日露戦争で負けていたら」
「大東亜戦争敗戦後、日本が分割されていたら」と思うとぞっとする
それは、ポーランドやリトアニアを見れば想像がつく

ヴァリニユス市内の「KGB 博物館」

KGB とは、ロシアの秘密諜報機関

ここは杉原千畝とは関係ないが、リトアニアの歴史を知る上で外せない場所

リトアニアは、1944 年(第二次世界大戦終戦)～1991 年まで、ロシアが占領していた

リトアニアが独立したのは 1991 年 建国から 28 年しか経っていない

この建物には、政治犯や生き残ったユダヤ人などが収容され、拷問や殺人が行われていた

その施設がそのまま保存されている貴重な博物館

「日本人が関係した世界史」ではないが

もし、日本が「日露戦争に負けていたら」

もし、「大東亜戦争の敗戦で日本が分割されていたら」

日本にもこのようなロシアの施設が存在していたかと思うと、「ゾッとする」



ここが 1991 年まで「KGB」があった場所だ

ビルの一角で一見分からない



英語表記がないので、分かりづらい普通のビルだ

近くの人に聞いて確認するとここが入口



中に入ると、案内板
チケットを買って案内に従う
写真撮影をする場合は別料金だ



展示品
リトアニア語なので分からない
これはよく見かける絵



たぶんシベリア鉄道でシベリアに向かう鉄道の写真

地下の施設へ



こんな階段を地下に降りる

当時のままだ

こんな地下通路が



当時の通信設備がそのまま残されている

ここからは残酷すぎるので、ほんの一部だけ紹介します

政治犯が入れた部屋



ユダヤ人の展示も

声が外に漏れない部屋



こんな厚い防音がなされていた
恐ろしい
水攻め
片足しか乗らない丸い台
そこに水を入れる



残酷すぎるため、このくらいにしておきます

KGB の展示品

小型カメラ



小型ビデオ

こんな展示品も



ローマ法王も訪れている

天皇陛下と小泉元総理がここを訪れたかどうかは分からない

建物をしようとする、チケット売場の恰幅のいいおばさんが、「英語で書かれているから、これを買って行け！」と本を薦める

「はいそうします」と素直に購入

なんといっても、この施設内のおばさんスタッフが一番怖かった

まるで看守のようだった(笑)



英語で書かれているが、それほど真剣に読めない

なぜか軍服を着ている兵士の見学者の数が多し

驚いたのは「US AIR FORCE」と胸に書かれた軍服を着ている女性や、赤いベレー帽をかぶっている軍人も多数



しばらくついでと、軍のバスが迎えに来ている
軍人の写真を撮るのは勇気がいる
バルト三国は「NATO」に属している
リトアニアには NATO のアメリカの空軍地基地が完成した

もう一度言う

もし日本が「日露戦争で負けていたら」、「大東亜戦争敗戦で日本が分割されていたならば」
こんな施設が日本にあったかもしれない
このバルト海から、ロシアの「バルチック艦隊」がウラジオストックに向かった、因縁の場所でそんなことを感じた



ヴィリニウスの空港から市内に向かうタクシードライバー(20代)に聞いた
「今でも、ドイツやロシアは嫌いかな？」
彼は「それは、親の時代の話だ」
「私はニュートラルだ」と答えた
ロシア人やドイツ人の観光客も増えてきているからだ
今でもリトアニアは、ドイツとロシアの通り道
バルト海側にはロシアの飛び地がまだ残っている
また、いつ紛争に巻き込まれるかわからない問題が起きやすい地域だ
恒久平和を祈る！
次回はヴィリニウス駅からカウナス駅に向かいます

リトアニア カウナスの「杉原千畝」の足跡 (2019年3月訪問)

カウナス編

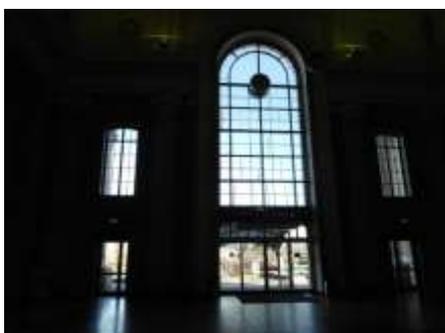
杉原千畝関連 ③「カウナス中央駅」

ヴィリニユス駅からカウナス駅へ電車で移動する

カウナス中央駅



駅の構内



十二支らしき絵も

チケットカウンター

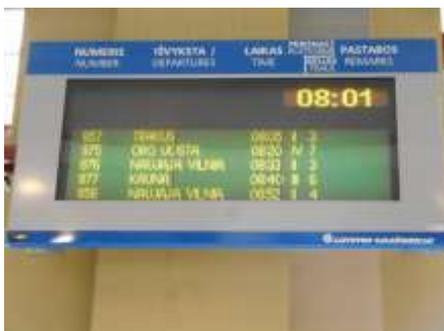
英語はそこそこ通じる



4.8 ユーロ これは後で分かった事だが、「普通席」の料金
カウナスまでは特急で1時間、普通で1時間半ほど

時刻表は隣のインフォメーションカウンターでもらえる

877 KAUNA 8時40分 III 6



表示のあるⅢの階段を登ると
ホームに線路がない



それでも表示がある

6番ホームはずっと奥

「Ⅲの6」の意味は、Ⅲの階段を登った6番プラットフォームの意味



建物に大きな人が

ヴィリニュス駅の名物の大男



列車を見つけた

「Kaunas」と書かれている



真ん中のボタンを押せばドアが開く

2階席へ

ここに座っていると、乗車中に車掌が「下に行け」という

ここは別料金のファーストクラスの指定席であった

そういえば、後から乗ってきた客が私の席の前でため息をついていた

一言言って欲しかった



ここは一階の自由席

たいして変わらない

昨晚雪が降った



カウナスまでは町らしい町はない

こんなのかな景色

「雪の華」



カウナス駅に到着 旧駅舎のようだ



ヴァリニユス方向

杉原千畝はここでビザを書きながらここからドイツに向かった逆方向



新しい駅舎(ホーム側)

カウナス駅の「杉原千畝」関連 ③



出口の左にプレート



駅の正面入口



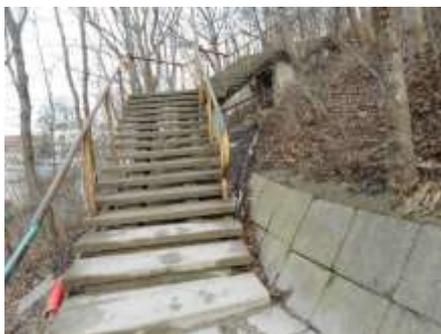
駅前の景色

ちょっと寂しい

先ほどの旧駅舎



「杉原千畝記念館」に歩いて向かうには、道を渡って奥の階段を登れば近道だが
信号がなく怖くて渡れない 歩道橋を渡ることにした



歩道橋を渡り、しばらく歩くとこんな階段が
高台からカウナスの駅を見下ろす



こんな道を進む ここは高台の高級住宅街



こんな古い建物



右側にクリーム色の建物が見えてきた

その反対側が「杉原千畝記念館」だ
うっかりしていると通り過ぎてしまう



目立った看板は出ていない

今回は「杉原千畝記念館」を紹介します

杉原千畝関連 ④ リトアニア カウナス「杉原千畝記念館」

杉原の家族が住んでいた元領事館跡

外務省の反対を押し切りユダヤ人に日本通過ビザを発給した場所

門や玄関は当時の写真とは少し違っている



「希望の門 命のヴィザ」と書かれている



見学者は別の入口から入る
入館口



まず、岐阜県八百津町(やおずちょう)杉原千畝記念館制作の日本語のビデオを見る
「葦(あし)のよりにしなやかに 木のよりに堅くなるな」
故郷の八百津町を流れる「木曾川」



段々畑

杉原千畝の千畝の意味は、「千の畝(うね)」

段々畑の土手が盛り上がり千の畝のように見えることから「千畝」と名付けられてたと言われている

有名な領事館前に集まるユダヤ人の写真

入口の門が見える



1600 枚のビザを発行

一家族一枚であったため、家族を含めると 6000 人のビザを発行



カウナス駅でも出発まで書き続けた

「私にはもう書けません」と言った場所

残されたユダヤ人は強制収容所に送られ処刑された

その場所は後に紹介します

ドイツに向かう杉原には護衛がついていたという

これは初耳

はたして何人だったのか



1986年7月31日 享年86歳

生き残ったユダヤ人が杉原を探し当て名誉は回復された
外務省はひたすら隠し続けていた

八百津町の杉原千畝記念館前の平和のモニュメント
前に訪れたことがある場所



以上ビデオから
執務室の再現
机と日章旗



ユダヤ人のリスト
「シンドラーのリスト」ならぬ「杉原リスト」

発行したピザのコピー



カウナスからモスクワに向かい、それからシベリア鉄道に乗る



終点はウラジオストック

ユダヤ人はシベリア鉄道でウラジオストック、そこから日本の船で敦賀、横浜、神戸からアメリカ、オーストラリア、ヨーロッパへと渡った



上海 ユダヤ人居「住地跡」は前に紹介した
メルボルンは先月紹介した



他の展示室



妻杉原幸子氏の遺影

著書は何度も読み返した



左からオランダ、リトアニア、日本、イスラエルの国旗

記念に日本から訪れた人の住所に国旗が刺さっている



長野県伊那市に旗を刺す

記帳



以前に紹介した4刷の本をプレゼントする

各2冊ずつ買っておいた

失礼がないよう新品をプレゼント

「一度も開いていない」というと、男性スタッフは本を開いてインクの臭いをかいで「新品だ」という
こんなひょうきんなところもある

事務所に通され、コーヒーとチョコレートをいただき本の説明をさせていただいた

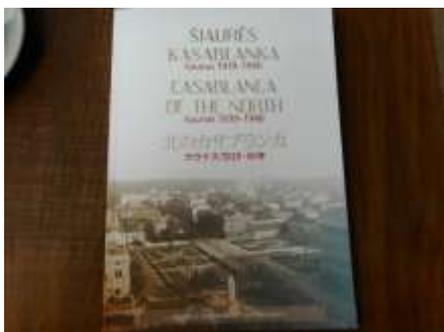
女性と男性の二人のスタッフは私の下手な英語を熱心に聞いてくれた

あいにく日本語を話すスタッフはいなかったが、

「大学の日本語学科の学生にプレゼントしてください」という旨を伝えた



お返しにリトアニア語、英語、日本語で書かれた「北のカサブランカ」という本をいただいた



3か国語で書かれているいい本だ

時間がある時にゆっくり読む予定

記念館を後にして、杉原が滞在した「メトロポールホテル」へと歩いて向かう



杉原千畝関連⑤ カウナスの「メトロポールホテル」
ここに一泊する



杉原千畝関連 ⑤
カウナスの「メトロポリス・ホテル」
「杉原記念館」の丘から階段で降りる



イスラム教のモスクが見えてくる
早春の街の景色



教会

歩道を整備するための工事が進められている
夏までにはきれいな歩道が出来そうだ



メトロポリス・ホテル

ここも杉原千畝関連

領事館を出てからこのホテルに滞在した ここでもビザを発給した
杉原のプレートが見当たらない

いやな予感

もしかして、イスラエルの公園の木と記念碑がなくなったように、プレートは消されているのか？



カフェの窓の前につけられていた

「1940年8月28日～9月4日まで メトロポリス・ホテルに
滞在した杉原千畝は「命のビザ」を発給し続けた」と書かれている



玄関から中に入る

趣のある昔ながらの回転ドア



チェックイン

ここも1泊5000円くらい

フロントのスタッフは無愛想に見えるが、いろいろ質問すると親切に答えてくれた

フロントの奥の古い金庫

カメラを構えたら席を外してくれた

別の写っても構わないと思うが、シャイなのか

フロント隣の杉原の写真

ここでは日本人や東洋人は見かけなかった

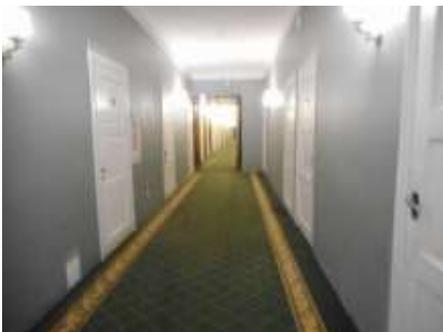
中国の上海にある「猶太(ユダヤ)博物館」にも杉原の写真が展示されているため、中国人でも知る人はいるはずだ



ルームキーをもらう
日本でも昔はこんなルームキーを見たことがある
くぼんだ部分は逆に吊り下げられるようになっている



階段の奥にはステンドグラス
廊下



部屋は広いが殺風景

杉原の泊まった部屋はどこか分からない

外の様子

テラスのコンクリートが崩れないようネットが貼られている

長居するとテラスごと崩れるのではないかと思い退散



裏から見るメトロポリス・ホテル

所々壁が崩れ落ちている

どこかがテコ入れしないと無くなりそうな気がする

杉原千畝関連 ⑥「カウナス第九要塞」

杉原関連最後のレポートです

19世紀にロシア帝国によって12カ所建てられた要塞の一つ

現存しているのはここだけ

第二次世界大戦時にはナチスの強制収容所として使われた



約5万と言われる主にカウナスのユダヤ人がここで斬殺されたという

ロシア、ナチス、ソ連に順にこの要塞は使われた

28年前まで現役でロシアに使われ、リトアニアの政治犯が収容されていた

斜めの屋根の下の資料館は、ナチスおよび、戦後ソ連に犠牲になった人々の写真や遺品が展示されている



要塞のジオラマ

日本が戦った「二百三高地の要塞」の要塞によく似ている

チケット売場



中の展示場

軍人の団体が視察していた

展示品



ユダヤ人が着せられた服

壁に貼られた思い



記帳をすれば色紙を壁に貼り付けてくれる

要塞跡

奥がピンクの建物、手前はナチスが建てたレンガ造りの塙

ポーランドの「アウシュビッツ強制収容所」やミュンヘンの「ダッハウ強制収容所」もこのスタイルの塙であった



子の入口から中に入る

面談室



収容施設

当時使用していたもの



杉原千畝に関する展示品

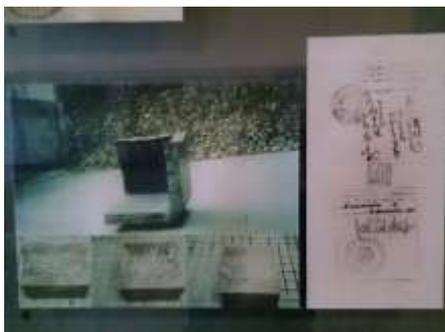
この部屋全部がそれに使用されている

これがあるということで、わざわざここを訪れた
かなりの写真が展示されている

日章旗と日本のものの展示



ヴィリニユスの「ホロコースト博物館」のオブジェ



下の写真は「月光」



あまり気持ちのいい場所ではないので、早々に出る



壁にこんなことが書かれている

1943年～1944年にかけて、この壁の近くで、ナチスにより銃殺や焼却が行われた



もう一つの興味あることは、ここは、要塞と収容所の二つの目的を持っていたこと
外から襲われない堅固な要塞と、後には、脱走できない収容所
それでも、67人が脱走できたという

19世紀のロシア時代の要塞は五角形につくられている



外から攻め込めば、堀に落ちて後ろから銃撃される

これは、日露戦争の時のロシアの要塞まったく同じ 角の部分



なぜか水が溜まるようにできている もし堀を乗り越えて上に登れたとしても



こんなものが待ち構えている 中から覗くとこんな感じ
設備は地下につくられていて、上からは見えない



「THE WAY OF DEATH」

ここから先で殺害が行われた こんなオブジェが



拡大すると顔がデザインされている 杉原千畝関連 6 カ所を視察して感じたこと

展示物は「ナチスドイツ 悪」、「杉原千畝 善」のようだが
中にはナチスに協力した「半悪人」、協力しなかった「半善」の人もいたことも事実
そこから振り返ると、「MEGA」ショッピングセンター
ここには「RIMI」が入っている



もう少し時間が取れれば、このショッピングセンターも視察したかった
毎日、相当な距離を歩いている 年が年だけに、身体にも気を付けなければ
オーストラリア メルボルン(2019年2月訪問)
今日は朝からタクシーに乗りメルボルン郊外を観光
電車やバスを使えば安上がりだが、時間の無駄も多い
今日の深夜便で帰国する予定
「メルボルンユダヤ博物館」
タクシードライバーはアフガニスタン出身のイスラム教徒
「ユダヤ博物館」へと言っても、場所が分かるはずがないので、グーグルで住所を調べる
「日本人が関係した世界史」関連で「メルボルンユダヤ博物館」へ
1940年前後、ヨーロッパのユダヤ人は、「樋口ルート」「杉原ルート」で、ハルピン、ウラジオストク(敦賀～神戸)から、上海、アメリカ、オーストラリアへと向かった
メルボルンのこの地域はユダヤ人が多く住む場所



ユダヤ博物館外観



「JEWISH MUSEUM OF AUSTRALIA」と書かれたプレート

ネットでは、土曜日休みと書かれていたが、実際は金曜日にのみ開館
かなりマニアックな場所なので、訪れる人が少ないのであろう



隣の道を奥に向かうと
移民当時のシナゴークの跡らしきもの



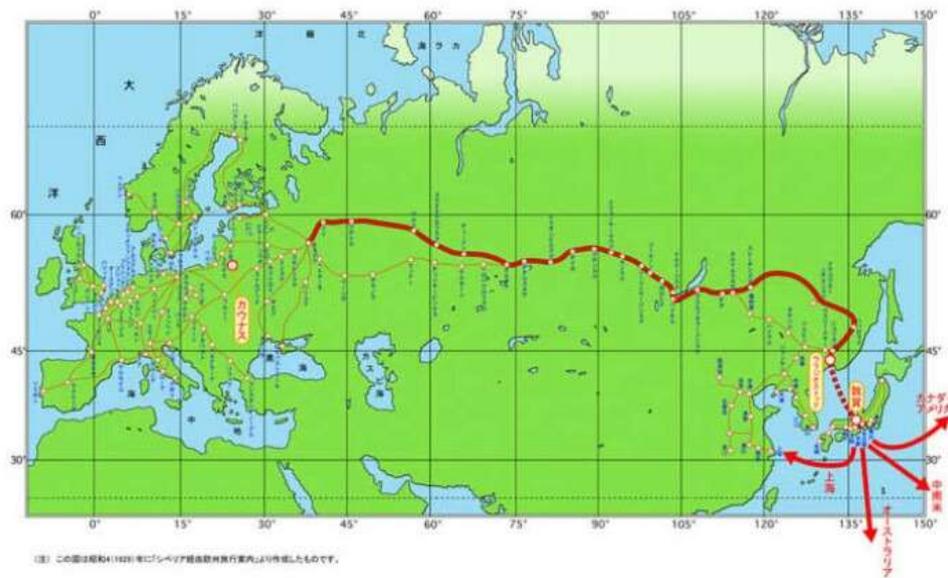
他に「JEWISH HOLOCAUST MUSEUM」もあるが、日本人との関係はないため行かなかった
「ホロコースト」まで頭を突っ込む気はない

ユダヤ人難民逃避経路

シベリア鉄道～ウラジオストク～敦賀～神戸から各国に避難

杉原千畝の命のビザは、日本通過ビザであったため、日本には10日間しか滞在できなかった

ユダヤ人難民逃避経路



研究は、まだ未完成 イスラエルに行って完成かな